

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, May, 15th, 1951.—No. 239

關西大學學報

第 2 3 9 號

昭和 26 年 5 月



關西大學學報局

自立と自主

教授 森川太郎

講和の声が近づくにつれて、自立経済の達成が又急を要する問題となつて來た。云うまでもなく自立経済とは、他国の援助を受けず、国民の勤労の成果だけで全民族の経済的必要を充足して行く經濟の謂である。ところが知られる如く、我国は敗戦以來年々多額に上るアメリカの援助に頼つて、今日まで經濟の維持と復興とを圖つて來た。而してその援助総額は約二十一億ドルに及んでいる。本年の七月一日に始る一九五二年度の対日援助は、或いは約一億ドルの程度とも云われ、或いは又講和の成立を待たず打切られるであろうとも傳えられる。いずれにしても我国は、早急に自立經濟と幸いにして近年我国に於ける生産の回復は相当著しく、昭和十年を一〇〇とする鉱工業生産指数は、昭和二十三年五九・一、二十四年七三・八、二十五年九二・一と逐年上昇を示し、昨年第四四半期からは大体戦前の水準を一割程度上廻つてゐると観測されている。故に此面からすれば、近い将来に自立經濟の目標を達成することも、左程難事ではないと見られ得よう。けれども少し深く考へると、問題は必ずしも簡単ではない。周知の通り敗戦に依つて我国の領土は、資源の乏しい四つの島に限局せられ、その狭小な領土に、増加率の高い八千数百万の人口が充満しているのである。生産の回復が顯著であるにも拘らず、現在国民の生活水準が、尙戦前の七〇%を多く出ていないと推定せられる

のも決して不思議ではない。而も更に問題は、この狹小な領土は資源に恵まれず、国民の必要とする食糧及び他の原料品は、国内の生産だけでは、到底その需要を満たすには足らないと云うことである。そこで我が國の經濟は勢い食糧及び原料を輸入し、工業製品を輸出して国内の必要を充たすと云う型の經濟、所謂貿易に依存する經濟とならざるを得ない。

云うまでもなく自立經濟とは、自足自給の經濟と云う意味ではない。従つて貿易があり、其限りに於て外国と相互依存の関係に立つていても、輸出と輸入とが均衡し、輸出代金を以て輸入代金が略済せられる得るならば、それで自立經濟と目され得るのである。此意味に於ては、我国の經濟が如何なる程度自立に近づきつゝありや、何よりも年々の貿易戻りに端的に表されていると見てよい。勿論戰後我国の貿易戻りは年々入超を示しているが、其額は昭和二十三年度四億二千万ドル余、二十四年度三億八千万ドル余、二十五年度一億四千万ドルと逐年減少し、茲にも自立への著しい接近が見られるのである。因に今までこれ等の入超戻りは、上記アメリカの対日援助で補填されて來たのである。又昨年度の入超の激減は主に朝鮮動乱に基く輸出の増加に依るものである。

我国貿易の今後には尙多くの問題が伏在する。けれども國際情勢が暫く現状で推移するものとすれば、輸出の好調は当分續くと見て大過ないであらう。すると

斯くて数字の面から見ると、自立經濟への前途は必ず悲觀を要しないように見える。しかし更に考えねばならぬことは、自立經濟の達成は又我国の經濟が、

我國民の自主的な運営に委ねられることを意味せねばならぬ、と云うことである。吾々の自主的な運営に委ねられた場合、我國の經濟は、從來連合軍の管理下にあつた場合と同様に、一路自立經濟の目標に向つて進み得ることになるであろうか。これは自らを恩に受けること甚しい疑問のようであるが、此疑問の意味は過去の一、二の事例を顧ることに依つて自ら明かとなるであろう。

即ち先づ戦後吾々は前途見定めのつかぬインフレの嵐にまき込まれたが、此インフレを安定したのは周知の通り、アメリカの銀行家ドッヂ氏の功績であつた。所謂ドッヂ政策の強行がなかつたならば、あのインフレが何處まで發展し、それに比例して国民の生活が如何なる苦境にまで沈淪したか、思つても栗然とするものがある。次に昨年朝鮮動乱による價格の暴騰は、勿論所謂特需もあつたのであるが、主として一部業者の時局便乗的な思惑に依るものであることが今では明かである。

凡そこれ等の事例を回憶する時、自立經濟の達成が同時に經濟的自主性の回復を意味することは、充分に強調される必要があるのである。吾々は、吾々自身の経済問題を誤りなく処理する精神的準備に於て、不足するところがないであらうか。自立經濟への客観的條件の成熟と共に、特に此側面への注意が肝要であることを感ずる。

山上憶良と日本書紀

教授 吉永

登

第二三九号 目次

表紙 獨立美術協会員 鳥海 青児

自立と自主 森川 太郎(表紙)

山上憶良と日本書紀 吉永 登 (一)

就職委員会開催 藤沢文庫受寄詔札

ハーバード大学よりの寄贈書 人事異

学内報 (三)

活動 教授研究出張

秋の野に咲きたる花をおよび折りかき数ふれば七

くさの花 其一 (四)

萩が花尾花葛花なでしこの花をみなへし又藤ばか

ま朝顔の花 其二 (五)

学 生 (四)

校 友 (五)

支部会 地方選舉當選者

続・校友の面影 (4) (六)

昭和二十六年度学科目担任表 (七)

米語について 斎藤 靜 (三)

モリエール関係書目 天野敬太郎 (一)

経済学会の改組 (表紙)

憶良が書紀の編纂に關係のあることを云はれたのは多分土屋文明氏が最初ではなかつたかと思ふ。即ち氏がその著旅人と憶良において

(佐々木信綱) 博士の論中卷五 (憶良の文) には
「時に日本書紀の用字に相似した点が見える」と云
はれて居る点は、私が前に短歌其一其二と註する
ことから憶良の書紀編纂への関與を想像した所を
一段積極的にすることが出来るやうで大へん有り
がたい。

歴大な史書が、たとへ年月を重ねたとしても、親王一人
の手になつたものとは考へられない。果して弘仁私記
序には太安麿が参加したこと傳へてゐる。この私記
序は、安麿と同族の多人長の書いたものであつて、そ
れだけに多少の警戒を要するのであるが、一面安麿が
古事記の撰者であることを考へれば、強いて疑ふにも
当らない。しかも二人のほかにもなほ多数の人々が編
纂に從事してゐることは明かで、ただ今日残つてゐる
資料だけでは知ることが出来ないと云ふまでのことで
あらう。

ところで筆者はさきに傳説歌の研究に興味を持ち、
必要あつて山上憶良も編者の一人ではなかつたかと考
へたことがある。その際は、單に論を進める上の前提
にすぎなかつたため、意をつくすことが出来なかつた
のであるが、ここに改めて取り上げてみたいと考へる

二

とあるのが共に其一其二などと註してある点を指し
て居られるのである。もとよりこれだけでは、佐々木
博士の所論をも含めて單なる偶然の一一致とも、又せい
ぜい影響を受けたにすぎないとも云へないことはない

憶良が書紀の編纂に關係のあることを云はれたのは多分土屋文明氏が最初ではなかつたかと思ふ。即ち氏がその著旅人と憶良において

(佐々木信綱) 博士の論中卷五 (憶良の文) には

しかしながら、新しい資料でも出ない限り、的確な証拠などあらう筈もないのに、吾々は氏の歎美的直感に敬意を表し、一応その意図に従つて探索をつづけて行きたいと考へる。

三

国史の編纂が国家の大業であることは云ふまでもない。しかも書紀は我国最初の史書であつて、漢文で書かれたものであるから、その編纂にあつては慎重に人が選ばれ、従つて当代一流の漢文学者が勤員せられたことと考へる。さうした際、遣唐使の隨員として彼の土に渡り、その眞面目な性格の故に學問に精進し文章をも存分に身につけて帰つたと思はれる山上憶良が起用せられたと考へることは無理ではなからう。

ところで、この推測は極めて漠然として居つて、凡そ學問的な雰囲氣からは遠いものではあるが、実はこれこそ資料の乏しい今日にあつては最も有力なものと云ふべきではなからうか。この意味では、以下述べようとするところこそ、次章を除いては土屋氏の所論と共にやゝ具体的であるだけに、却つて危險性を孕んでゐないとも云へないことはない。

四

養老五年の正月に憶良は、後に位に即いて聖武天皇となられた當時の皇太子の御用掛を命ぜられてゐる。同時に任命せられてゐる人々は佐爲王伊部王等二人の皇族を初めとして、文章博士の山田三方、紀清人、樂浪河内、算博士の山口田主、明法博士の塙屋吉麿等十七人で、何れ劣らぬ碩学ぞろひと云ふべく、東宮が次代の天皇を約束された方であるからには、その人選は慎重を期せられたものと考へてよからう。ところでこ

れ等十七人の中、紀清人は和銅七年二月に、三宅藤麿と共に國史の編纂を命ぜられた人であつて、その國史と六年後の養老四年に撰述せられた日本書紀との関係は明かではないが、何等かのかはりのあることは諸家のひとしく認めるところとなつてゐる。或はこれらの人々は、養老四年七月に書紀の編纂を終つて半年ばかりの休養の後、翌五年の正月早々を期して皇太子の御用掛を命ぜられたと考へられないでもない。共に当代第一等の学者を要求する点で相似してゐるからである。勿論十七人の中にもその專攻するところによつて直接國史編纂に關係があるとは考へられない学者もあらうが、恐らく人格者であり、文章家である故に、その選入につたと思はれる憶良は何れにしても洩れ得べくもないものである。

本學の横田健一氏の御教示によれば、皇太子とは共に皇統に關係する点で密接なつながりがあるとのことである。續日本紀の編著者が東宮學士菅野眞道であるとから氏の見解には從ふべきもののやうで、それだけに東宮御用掛となつた憶良と書紀の編纂との關聯は深いものがあるといへようか。

五

日本書紀の文章がしばらく唐土の文辭を利用し、それを綴り合はせて潤飾せられてゐることは周知のことと云ふ歌は、書紀では景行天皇の作として歌詞も波斯祁夜斯わざへの方よ雲居たち來も

「古事記に見える日本武尊の渡來書」において書紀編著といへども、一々その原典にあたつて参考してゐるわけではなく、藝文類聚の如き類書を座右におき、これを利用したものであることを立証せられたのである。多少趣がちがふにせよ、曾ての作文が詞藻類聚の如き麗句集によつて綴られたことを考へれば如何にもとうなづけることで、書紀述作の樂屋裏をあばかれたものとしてその業績は高く評價せられるべきであらう。

つづいて氏は國語と國文学に發表せられた「憶良の述作」という論文において、万葉集卷五に見える憶良の作になる「沈痼自哀文」も同じく藝文類聚を参考したるものであることを明かにして居られる。氏はこのやうな共通した事象をとらへて、「この態度は上代人一般的の述作にも通じる手法である」と云つて居られるが、思ひ切つて憶良が書紀の編纂に從事したゆゑの一致と見られないものであらうか。このことに關しては直接氏の御意見も伺つたのであるが、必ずしも否定的ではなかつたやうに記憶してゐる。

六

古事記に見える日本武尊の渡來書
波斯祁夜斯わざへの方よ雲居たち來も
といふ歌は、書紀では景行天皇の作として歌詞も
波斯祁夜斯わざの家の方よ雲居たち來も
といふ歌は、書紀では景行天皇の作として歌詞も
と小異がある。この作者が相違することについては、今は触れないことにして、歌の第一句が夫々「はしけやし」「はしきよし」とある点のみを取り上げることにした。そこでまず前半の「はしけ」「はしき」について考へるに、これらが共に形容詞の連体形であることは疑ひないのであるが、後者の「はしき」は万

學內報

講師 高塚洋太郎
三上諦 聽聽
本大學專任講師に任する。

昭和二十六年四月一日付(各通)

員外教授 井上吉次郎
昭和二十六年四月十六日付本大學教授に出席

任し文學部勤務を命する

就職委員會開催

四月三十日午后三時天六學舍本部會議室に於て就職委員會を開催、本年度の計畫につき打合せを行つた。尙本委員會は昨年八月に発足を見、豫想外の好成績をあげ、本年度は更にその成果の増進を期している。

藤澤文庫受寄訪禮

前に寄贈を受けた藤澤文庫に關し、五月十六日、理事長、學長、館長は藤澤嗣子を訪問、親しく礼を陳べた。

ハーバード燕京研究所よりの寄贈書

今回ハーバード燕京研究所(Harvard-Yeaching Institute)所長エス・エリセフ氏より本學に於ける東洋學術研究資料として同所發行アジア研究錄(Journal of Asiatic Studies)初号より最終号に至る三十八冊の寄贈があつた。この研究錄は各国に於けるアジア研究の多數權威者の研究を集録したものであつて、英國のアジア研究所錄と相並んで東洋の研究に欠くべからざる資料である。茲にエリセフ所長に対し深甚なる謝意を表する。

人事異動

員外教授 澤瀉久孝

本大學教授に任し文學部勤務を命する

助教授 櫻田譽

本大學教授に任し法學部勤務を命する

助教授 池垣定太郎

本大學助手に任し文學部勤務を命する

居つて時代的相違と考へることは当らな

(昭和二六、四、九)

教授研究出張

△杉原四郎教授 昭和二十六年四月四日より同六日まで東京大學經濟學部で開催の昭和二十六年度經濟學史會總會及び研究報告會に出席

△福本喜之助教授 昭和二十六年四月四日より同七日まで東京早稻田大學で開催の日本獨文学会第五回總會に出席

△松原藤由教授 昭和二十六年五月十一日より同十五日まで名古屋大學で開催の昭和二十六年度日本經濟政策學會總會及研究會に出席

計報

山口教授令室逝去 山口辰雄教授令

室靜子殿は豫て病氣療養中の処去る五月一日逝去されました、茲に謹んで哀悼の意を表します。

(二頁よりつづく)

葉集中しばく用ゐられてゐるに反し、前者の「はしけ」はその用例が見当らない。

しかし同じ系統と見るべき「かなしき」「悪しき」などが東歌に用ゐられてゐるところから、「はしけ」が標準語で

「はしけ」が方言であつたとも、又逆に「はしけ」が新しい言葉で「はしけ」が古語であつたとも考へられるので、軽卒な判断はさし控へるべきであらう。

次ぎに「やし」と「よし」との相違について考へるに、これらは感嘆の助詞「や」「よ」に夫々強めの助詞「し」が添

うたもので、何れも古くから用ゐられて

いようである。山田孝雄博士は「や」と「よ」との相違は接續にあるとして、「や」は主として用言の連体形に添ふことが多く、「よ」は体言もしくは助詞「も」に添ふことが原則であると云つて居られる。

これは合成語としての「やし」「よし」についても云へることで、「はし」「はしき」が何れも形容詞の連体形である以上、「やし」につづくのが本來の形と云ふべきであらう。従つて今の場合も古記の「はしけやし」が正しく、書紀の「はしきよし」は変化したものと考へられるのであつて、その点古事記より書紀への通説とも矛盾しない。

ところで、この二つの言葉は万葉集にもしばく用ゐられてゐるのであるが、書紀の「はしきよし」のみについていへば山上憶良と大伴持とによつて用ゐられてゐることが知られる。持は憶良に学んだ人であるから、万葉集における「はしきよし」の使用は憶良に初まり、彼の周囲に止まつたと考へることが出来よう。

かくして「はしきよし」といふ語法的には誤りとも見るべき特殊な言葉が、書紀にあらはれ、憶良によつて初めて用ゐられたことが明かになつたのであるが、これを憶良が書紀の編纂に関與したためと解することは當らないであらうか。

以上何一つきめ手のない推論の羅列に終つたが、多少でも取るべき点があれば幸と考へてある。何分時間の切迫と紙数の制限とはすつかり文章を萎縮させ、しかもなほ論すべき一二を残してしまふことになつた。此の問題については他日改めて委曲をつくしたいと考へてある。

校友

川邊支部總會

四月八日午後三時より伊丹市八木房に於て川辺(兵庫縣)支部總會が開催せられた。

先ず小原是榮氏の司会に始まり角田支部長の開会の辭に次いで岡野學長の先ず小原是榮氏の開会の辭あり、次いで磯野充賀氏の司会のもとに自己紹介が行われた。本学より出席の學長並びに関春原兩理事よりは大學の近況及び今後の方針に就ての説明があり、又寄附保證に關し國民生命社員出張して解説をなし、引き支部役員選挙が行われ次の如く決定した。即ち支部長 磯野充賀氏、副支部長 甲川巖氏、幹事 安井章吾、佐野栄二、井上清一、上田敏、甲川彰彦、倉橋貞一の諸氏。これより懇親宴会に入り歎談に時を移し、午後七時半支部長の閉会の辭を以て盛会裡に散会した。当日の出席者左の通り

大學側 岡野學長、關連事、春原理事
支部側 小原是榮、磯野充賀、深川実、吉永登、安井章吾、安井一夫、甲川巖、佐野栄二、安田信一、板垣尚三、山本三郎、藤原徳次、池田宏井上清一、廣西好太郎、今北治男、中瀬正雄、上田敏、筒井健右衛門、甲川彰彦、倉橋貞一、今井裕六(願不同)

神戸支部春季臨時總會

去る四月十四日(土)午後二時より山手北京樓に於て神戸支部春季臨時總會の開催を見た。今回の總會開催は三月二十

日の専門部工專有終記念式典の举行に当

りこれを一層意義あらしめる爲のもので

ある。先ず向井裕亮氏の司会に始まり角

田支部長の開会の辭に次いで岡野學長の

挨拶及和田理事、阿部監事より大學の近

況報告並びに母校拡充五ヶ年計畫等に就

て夫々詳細な説明があつた。尙当日は元

本學講師であつた兵庫縣知事岸田幸雄氏

が今回贊助會員になられた報告があつた

本信正、三浦健次、池田明、水本信夫、橋本太

一、山本泰治、山本鎧郎、栗坂謙、木曾本實三

阿佐美久雄、大西忠三郎、水本千代、松羽間鉄

雄、池上泰太郎、佐々木勝也、小川立朝、田中

幸治、岡本夏臣、石井豊彦、大森義造、山下榮

光島正典、片山菊治郎、岡本修三、新井正雄、

向井裕亮、日高良雄

(願不同)

地方選舉當選者

知事 岸田 幸雄(兵庫縣) 本學贊助員
市長 高垣 善一(和歌山市) 昭二大經卒

関西大学文学会編集文論集

第一卷・第一號

昭和廿六年三月刊行・定價八十円

建礼門院右京大夫集の性格 吉永 登
萬葉「はなり」妻考 吉永 登

「傳玄歌における語義の誤解について」 吉永 登

ハムレット劇の Ghost の矛盾に就て 横本金次郎

その類話、起原と發展について(其の一) 広瀬捨三

世界平和と新聞紙 藤田進一郎

大阪府吹田市千里山(関西大學内)

發行所 関西大学人文科学研究所

尙当日の出席者次の通り

大學側 岡野學長、和田理事、阿部監事

支部側 山崎敬義、山上鏡彦、松本包文、貴答喜

作、小山平治、米田敏、鶴永武、星野正身、吉

田貞澄、入井政行、來間智、角田好太郎、原田

鹿太郎、難波方、久保正雄、渡邊道男、多賀直

一、大塚俊勝、西中治、西光健次、森岡猛志、

今岡琢磨、山本末男、齋藤國臣、戸倉敏夫、岩

本信正、三浦健次、池田明、水本信夫、橋本太

一、山本泰治、山本鎧郎、栗坂謙、木曾本實三

阿佐美久雄、大西忠三郎、水本千代、松羽間鉄

雄、池上泰太郎、佐々木勝也、小川立朝、田中

幸治、岡本夏臣、石井豊彦、大森義造、山下榮

光島正典、片山菊治郎、岡本修三、新井正雄、

向井裕亮、日高良雄

(願不同)

高棕 正次(奈良市) 大七專法中退
府縣會議員 江村 至身(阿倍野区) 大一二專法卒
小林 嶽(都島区) 昭八專二法卒
高橋 重夫(枚方市) 昭西專二法卒
櫻本 親義(守口市) 大五專法中退
木村 栄(広島縣) 大五專商卒

市會議員 植田 完治(東区) 昭七大法卒
坂井 三郎(東住吉区) 昭一六大法卒
多賀谷 哲(住吉区) 明四五專中退
寺西 武(旭区) 昭二四大法卒
土井 喜美(西成区) 昭三專法中退
中石 清一(東住吉区) 昭五大法卒
宮元民之助(東淀川区) 昭三專法卒
横山 高光(生野区) 昭三專法卒
辻本 幸臣(富田林市) 昭六專法卒
川井幸太郎(尼崎市) 昭一專法卒
佐々木砂夫(吹田市) 昭二五大法卒
西岡 審(富田林市) 昭四專法中退
今本 治一(岸和田市) 大二專法中退



高棕 正次(奈良市) 大七專法中退
府縣會議員 江村 至身(阿倍野区) 大一二專法卒
小林 嶽(都島区) 昭八專二法卒
高橋 重夫(枚方市) 昭西專二法卒
櫻本 親義(守口市) 大五專法中退
木村 栄(広島縣) 大五專商卒

市會議員 植田 完治(東区) 昭七大法卒
坂井 三郎(東住吉区) 昭一六大法卒
多賀谷 哲(住吉区) 明四五專中退
寺西 武(旭区) 昭二四大法卒
土井 喜美(西成区) 昭三專法中退
中石 清一(東住吉区) 昭五大法卒
宮元民之助(東淀川区) 昭三專法卒
横山 高光(生野区) 昭三專法卒
辻本 幸臣(富田林市) 昭六專法卒
川井幸太郎(尼崎市) 昭一專法卒
佐々木砂夫(吹田市) 昭二五大法卒
西岡 審(富田林市) 昭四專法中退
今本 治一(岸和田市) 大二專法中退

続
・校友の面影

— 4 —

舍及び外苑に足を運び、氏の在学當時と見違える大学の発展に驚きと喜びとをこめて語られた。

長加藤正人氏を参議院に送つて今を時めく大会社経営の多繁な社務を執掌している。

独立美術協会員

鳥海青兒氏

◆……氏は明治三十五年府奈川縣麻沢の出身。大正十五年学部商科の卒業、在学中は絵画部と音楽部とに力を竭



烏海奇兒用

し、夙にその俊異の才を示し、在学中既に春陽会に入選、全く美術爛とは憐れむに、い出身の独立独歩型の作家である。卒業後春陽会々友となり、後独立美術協会に籍を移して十年、今や独立美術協会の重鎮として、將た又日本洋画壇の鬼才として多端な活躍を続いている。この間氏は昭和五年より四年間に亘る滞欧生活の体験を通して研鑽を積んだ。氏の足跡は西欧各地に言うに及ばず、アフリカ、トルコにまで至り、数多くの異色作を残している。

◇……氏は偶々此の度西下して、母校を懐み、二日間に亘つて千里山大学作品を作つているが、誰が見、誰が選ぶかはむつかしい問題である。一般大衆は作家の良い素質を引き出す観賞力がない。だから或る程度のレベルまで達しなければ展覧会も御破算せねばならないのではないかと思う。そういう点では将来は個展に向つて行つた方がよいと思う……」

國壯三郎氏は大正十五年専門部法科の出身「敗戦の責任の一端は財界人があり政治に冷淡であつたことはいなめない。終戦によつて民主化された國の最高機関の國会に業界代表を送るべきだ」との慾意を受けて昭和二十一年島根縣から立候補して最高点で当選し、政界にも活躍を期待されたのであつたが、適ま病を得、二足のわらじははくべきでないと一ヶ年にして辞任し、社

◇…………明治三十四年生、四十九才、
髪白きを加え、常に年輩以上に見られ
るのは苦勞したせいだと自分で云つて
おられるが、接する者に温か味を覚え
しめる人徳を具えている。

卷之三

飯國莊三郎氏

◇……糸へん、金へんと云われてい
るが、大和紡績株式会社常務取締役飯

A black and white portrait of a man with dark hair, wearing a dark suit jacket, a white shirt, and a dark tie. He is looking slightly to his left. The image is somewhat grainy and appears to be from an old newspaper or magazine.

兼任、二十一年代議士当選、同社人事
部長涉外部長を兼任、二十三年代議士
を辞退して常務取締役として現在に至
つている。

國莊三郎氏は大正十五年専門部法科の出身「敗戦の責任の一端は財界人があまり政治に冷淡であつたことはいなめない。終戦によつて民主化された國の最高機関の國会に業界代表を送るべき

だ」との慾憇を受けて昭和二十一年島根県から立候補して最高点で当選し、政界にも活躍を期待されたのであつたが、適ま病を得、二足のわらじはくべきでないと一ヶ年にして辞任し、社

◆……明治三十四年生、四十九才、
斐白きを加え、常に年輩以上に見られ
るのは苦勞したせいでと自分で云つて
おられるが、接する者に温か味を覚え
しめる人徳を具えている。

昭和二十六年

新制大学院 学科担任表

(昭和二十六年五月十日現在)

新制大学院 法學研究科	
専攻科目	
憲法学研究(講義) 教授 中谷 敬壽	憲法学研究(講義) 教授 滝川 太郎
刑法学研究(講義) 教授 滝川 幸辰	刑法学研究(講義) 教授 藤谷 謙二
政治学研究(講義) 教授 岩崎 卵一	政治学研究(講義) 教授 矢口孝次郎
民法学研究(一)(講義) 教授 福島 四郎	民法学研究(二)(講義) 教授 池垣定太郎
民法学研究(二)(講義) 教授 木村 健助	民法学研究(三)(講義) 教授 福島 源治
商法学研究(講義) 員外教授 西本 寛一	商法学第一部、英法 教授 横畠定太郎
(演習) 同	(演習) 同
選択科目	
歴史学研究—国史 (講義) 講師 魚澤惣五郎	歴史学研究—国史 (講義) 教授 三谷 友吉
行政法学研究(講義) 教授 中谷 敬壽	行政法学研究(講義) 教授 三谷 友吉
国際法学研究(講義) 員外教授 恒藤 忠雄	国際法学研究(講義) 教授 三谷 友吉
法制史研究(講義) 講師 薮熊 繁繁	法制史研究(講義) 教授 三谷 友吉
英米法研究(講義) 員外教授 大阪谷公雄	英米法研究(講義) 教授 三谷 友吉
文藝研究科	
英語学及英米文学研究(講義)	英語学及英米文学研究(講義)
英語学及英米文学研究(講義) 員外教授 石田 忠雄	英語学及英米文学研究(講義) 員外教授 石田 忠雄
英語学及英米文学研究(講義) 教授 三谷 友吉	英語学及英米文学研究(講義) 教授 三谷 友吉
経済學研究科	
専攻科目	
英語学及英米文学研究(講義)	英語学及英米文学研究(講義)
英語学及英米文学研究(講義) 員外教授 山本 忠雄	英語学及英米文学研究(講義) 員外教授 山本 忠雄
英語学及英米文学研究(講義) 教授 藤谷 謙二	英語学及英米文学研究(講義) 教授 藤谷 謙二
英語学及英米文学研究(講義) 教授 正人	英語学及英米文学研究(講義) 教授 正人

新制学部 法學部	
(第一部及第二部共)	
生物学	生物学
東洋文学	東洋文学
日本法制史	日本法制史
佛語	佛語
商法第二部	商法第二部
会計学	会計学
佛語	佛語
心理学	心理学
國法學	國法學
法 學 部	
民法第二部、英法	民法第二部、英法
政治学概論、社会学概論	政治学概論、社会学概論
支那文学研究(講義) 教授 高橋 盛孝	支那文学研究(講義) 教授 高橋 盛孝
英語学研究(講義) 講師 大塚 信高	英語学研究(講義) 講師 大塚 信高
古與語研究(講義) 講師 岩倉 具美	古與語研究(講義) 講師 岩倉 具美
刑法、英法、法学演習	刑法、英法、法学演習
外国政治書、国際法、政治学演習	外国政治書、国際法、政治学演習
川上 敬逸	川上 敬逸
木村 健助	木村 健助

民法第三部	佛法、法学演習	生沢 万壽夫	井上 吉次郎	足立 忠夫	行政第一部、日本国憲法	桜田 譲
木村 健助	木村 健助	板原 哲夫	石渡 俊一	鑄方 貞亮	憲法、法理学	中谷 敬壽
大石 義雄	大石 義雄	猪熊 繁繁	猪飼 永太郎	飯田 正一	民法第一部、英法	福島 四郎
小川 忠藏	小川 忠藏	宇野 史郎	宇野 史郎	内田 修	刑事訴訟法、社会法	和田 豊二
櫻本金次郎	櫻本金次郎	遠藤 汪吉	遠藤 汪吉		商法第一部	池垣定太郎
忠雄	忠雄				民法第三部、独法、法学演習	

—(8)—

佛語	日本概史說
獨文學特殊講義	佛野 宇野 史郎
心理學、教育心理學	内山貢三郎 遠藤 汪吉
統計學	岡部 利良
獨語	大崎 義夫
英語	小川 忠藏
論理學	加藤由治郎
獨語	堀野 鐘田 博夫
佛語	瞞田 賴
作詩作文法	川村勝太郎
自然地理學	木村 春彦
社會學概論	藏内 敦太
宗教學概論	久山 康
獨文學特殊講義	小牧 健夫
世論及宣傳	小山 榮三
東洋史特殊講義	佐藤 春彦
佛文學作品研究(一)	佐藤 敦太
獨語	佐藤 長
近代文學	佐野 一男
獨語	斎藤 清
數學、科學概論	斎藤 美文
獨語	潮崎 俊一
考古學	榎原 雅
英語	鈴木 重貞
專門國語	末永 雅雄
教科教育法	菅沼 拜治
獨語	田中 健一
考古學	田中 健三
佛文學作品研究(三) 演習	田中 栄一
專門佛語	田中 英雄
佛文學作品研究(三) 演習	田中 英雄
生理學	宇野 魚澄惣五郎

印度哲学史	日本史特殊講義	美学概論、演劇映画、西洋	支那語	教育史、教育実習、教科教育法	独文学作品研究(二)	新聞編集論、取材論	獨語	英語	国語学概論	物理学	新間文章論、演習	英米佛哲學	専門漢文	放送論	人文地理学	英語	思想史概説	英語	中古文学	英語学演習	哲学史、西洋哲学史	中古文学	英語	人文地理学
高畠茂助	竹田寛我	竹村聰義	辻本春彦	寛田知義	中村恒雄	長野敏夫	中川清三	庭田四郎	林和比古	橋田慶藏	原田讓三	原田政夫	福島俊翁	藤田義信	藤岡謙二郎	星野喜望	山崎紀男	細川董	本多平八郎	堀源	山本忠雄	山本栄一郎	山口平四郎	
高畠茂助	竹田寛我	竹村聰義	辻本春彦	寛田知義	中村恒雄	長野敏夫	中川清三	庭田四郎	林和比古	橋田慶藏	原田讓三	原田政夫	福島俊翁	藤田義信	藤岡謙二郎	星野喜望	山崎紀男	細川董	本多平八郎	堀源	山本忠雄	山本栄一郎	山口平四郎	
高畠茂助	竹田寛我	竹村聰義	辻本春彦	寛田知義	中村恒雄	長野敏夫	中川清三	庭田四郎	林和比古	橋田慶藏	原田讓三	原田政夫	福島俊翁	藤田義信	藤岡謙二郎	星野喜望	山崎紀男	細川董	本多平八郎	堀源	山本忠雄	山本栄一郎	山口平四郎	
高畠茂助	竹田寛我	竹村聰義	辻本春彦	寛田知義	中村恒雄	長野敏夫	中川清三	庭田四郎	林和比古	橋田慶藏	原田讓三	原田政夫	福島俊翁	藤田義信	藤岡謙二郎	星野喜望	山崎紀男	細川董	本多平八郎	堀源	山本忠雄	山本栄一郎	山口平四郎	

英語	獨語	矢野 增田
英語	獨語	純臣 溝辺
日本史特殊講義	日本史文學	忠雄 村山
英語	英語	吉永 米田
心理学概論、心理学	論理學	孝雄 和田
日本史特殊講義	日本史特殊講義	安雄 眞辺
教 授	教 授	吉田 春藏
日本經濟史、經濟史特殊研究	日本經濟史、經濟史特殊研究	吉田 和田
演習	演習	安雄 陽平
英文經濟書、經濟學、演習	英文經濟書、經濟學、演習	眞辺 春藏
獨文經濟書、經濟原論特殊研究	獨文經濟書、經濟原論特殊研究	柴田 和田
經濟原論	經濟原論	柴田 眞辺
統計學、經濟統計學、數理經濟學	統計學、經濟統計學、數理經濟學	澤村 榮治
演習、英文經濟書	演習、英文經濟書	澤村 榮治
經濟變動論、國際經濟論	經濟變動論、國際經濟論	松原 藤谷
財政等、演習	財政等、演習	高木 謙三
經濟學史、演習	經濟學史、演習	杉原 三谷
工業經濟學、經濟政策	工業經濟學、經濟政策	高木 友吉
演習	金融經濟論、演習	松原 森川
金融經濟論、演習	金融經濟論、演習	藤田 太郎
經濟史、演習	經濟史、演習	矢口孝次郎 今西庄次郎
兼任教授	兼任教授	

民法	講師	貨幣論、英文經濟書、演習
歴史学		
社会学		
生物学		
同		
東洋文学		
政治学		
法学		
同		
日本文学		
日本国憲法		
会計学總論、演習		
社会思想史、経済哲学		
佛文經濟書、演習		
商業経済学、交通経済学		
国際法		
数学、化学		
社会政策		
商法第一部、同第二部		
行政法		
公企業論		
英語		
独語		
佛語		
明石	三郎	忠三
秋山	博愛	紀男
岩崎	卯一	秀男
小山	隆	堤原
生沢	万壽夫	西川
田中	英雄	清治
福島	俊翁	藤本
木下	丹	是
池垣	定太郎	田中
内田	修	大崎
飯田	正一	堀
金子	又兵衛	細野
釜田	喜三郎	八鳥
加屋	郁太	細野
加藤	由次郎	星野
内田	修	大崎
樺野	郁太	眞辺
河村	宜介	竹村
河上	敬逸	山岡
河村	信一	堀田
国茂	胤臣	義夫
河野		武雄
近藤		春藏
桜田		大崎
竹中		眞辺
廣瀬		竹村
米田		山岡
莊保		堀田
三郎		義夫
龍雄		武雄
文二		春藏
營		大崎
穎		眞辺
松井		竹村
浪江		山岡
木下		堀田
石渡		義夫
高橋		武雄
石川		春藏
原		大崎
宇野		眞辺
溝辺		竹村
中川		山岡
溝辺		堀田
星野		義夫
信夫		武雄
小川		春藏
忠藏		大崎
三宅川	正	眞辺
信		竹村
舞		山岡
治		堀田
源		義夫
治		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎		大崎
政		眞辺
夫		竹村
涌		山岡
盛		堀田
孝		義夫
清		武雄
一		春藏
清		大崎
俊		眞辺
一		竹村
東		山岡
作		堀田
史		義夫
郎		武雄
政		春藏
夫		大崎
涌		眞辺
盛		竹村
孝		山岡
清		堀田
一		義夫
清		武雄
俊		春藏
一		大崎
東		眞辺
作		竹村
史		山岡
郎		堀田
政		義夫
夫		武雄
涌		春藏
盛		大崎
孝		眞辺
清		竹村
一		山岡
清		堀田
俊		義夫
一		武雄
東		春藏
作		大崎
史		眞辺
郎		竹村
政		山岡
夫		堀田
涌		義夫
盛		武雄
孝		春藏
清		大崎
一		眞辺
清		竹村
俊		山岡
一		堀田
東		義夫
作		武雄
史		春藏
郎	</td	

商學部

社會學	憲法	心理学	體育実技
同	獨語	獨語	獨語
岸源左右衛門	川口 勇	中谷 敬壽	難波 紹吉
猪飼永太郎	中村 恒雄	中村 恒雄	中村 恒雄
福本喜之助	高塚洋太郎	潮崎 俊一	潮崎 俊一
高塚洋太郎	中井 駿二	高塚洋太郎	高塚洋太郎
水谷 摶一	鈴木 重貞	廣岡 英雄	水谷 摶一
杉原 雅	山野 勇	山野 勇	杉原 雅
庭田 四郎	斎藤 清	山本栄一郎	庭田 四郎
渡辺 格司	矢野 純臣	山本栄一郎	渡辺 格司
松田 純臣	勇	斎藤 清	松田 純臣
演習	演習	演習	演習
會計學總論、經營學總論、演習	會計學總論、經營學總論、演習	會計學總論、經營學總論、演習	會計學總論、經營學總論、演習
佛文經濟書、貿易實務論、商業英語	佛文經濟書、貿易實務論、商業英語	佛文經濟書、貿易實務論、商業英語	佛文經濟書、貿易實務論、商業英語
社會政策、勞務管理論、英文經濟書	社會政策、勞務管理論、英文經濟書	社會政策、勞務管理論、英文經濟書	社會政策、勞務管理論、英文經濟書
河野 稔	河野 稔	河野 稔	河野 稔
植野 郁太	賀屋 俊雄	今西庄次郎	植野 郁太

答

英 文 經 濟 書	演 習	河 村 宜 介
商 業 經 濟 学	交 通 經 濟 学	山 口 辰 雄
英 文 經 濟 書、演 習		安 田 信 一
財 政 学、演 習		藤 谷 謙 二
經 濟 原 論、金 融 經 濟 論		森 川 太 郎
民 法		明 石 中 谷
憲 法		敬 壽 堀
經 濟 史、演 習		鑄 方
經 當 比 較		岡 部 利 良
商品 学、化 学		河 村 信 一
商 法 第 一 部、同 第 二 部		國 歲 駕 兵
保 險 論		近 藤 文 二
工 業 資 記 原 價 計 算		山 下 勝 治
生 產 管 理 論		菅 谷 重 平
公 企 業 論		竹 中 龍 雄
分 析		陶 山 誠 太 郎
工 業 經 濟 学		松 原 藤 田
英 語		三 宅 川 正
同 独 語		小 川 忠 藏
佛 語		梶 野 賴
經 濟 学		莊 保 三 郎
法 学		沢 村 栄 治
		池 埤 定 太 郎

米語について

福井大学教授 齋藤 静

米語について考察すべき方面は多々あるが本講義においては主として発音の方面を述べることとする。それも英語の発音と比較して可なりの差異を認められる点だけを概説するのでありて、綿密に観察すれば可なり多くの微細な差異を認め得るのであるが、発音を専門として研究する人は別として、一般の人々にとって大体の異同を心得ておけば足りると思う。これは實際の経験に従じても明らかである。

米語は発音の研究上、三大地区に分けられるのが普通である。(一) 南部(S.) Va., N.C., S.C., Tenn., Fla., Ga., Ala., Miss., Ark., La., Tex., Maryland の一部、W. Va., Ky., Okla. (二) 東部(E.) = n-m-な市及びその周囲の地、(三) 中央(G.) ノネクテカット河の東部地域。(四) 北部(N.) 東部と南部の地域を除いた残りの全部の地域で、全米の約三分の一に相当するもの。この地域を Middle West と呼ぶといふ。

さてこれら3地域の各特質はどういえども、SE は大体において英語流の発音を行われ、それのNには較少の影響を見のが

ためである。最もRetroflex として發音されるのがNew York,

New York, student, duty, tutor 等が該當する。

例： artist, err, irksome, order,

[ə:tɪst], [ɔ:rðəs], etc. むだり。 [ɔ:]

Retroflex とよばれる。

(ア) 英語の [ɑ:] は [a:] 又は [æ]、又は [e] むだり。長母音又は半長母音むだり。 [ɛ:] に有声子音

がつづく。例： glass, bath(s), dance, can't, branch,

half, halves, laugh, aunt, etc. たゞ

べし。 A.S. の語類の E.S. と見

ては英國流に發音される。

(イ) 甚しい差異は英語の [ɔ:] が [a]

むだり。 [a] は [ɑ:] と

連絡する。例： tomorrow, body,

college, collar, hot, stop, box,

comma, common, drop, dock,

doctor, doll, follow, rod, yacht,

etc. むだりに屬する語類は極めて多く

例えば twenty が [twenɪ] へたれど、これは方言的である。

(三) 母音字 +r、米音が英語と普遍的に異なる点は、語頭、語中、語尾に現われるrをすべて發音する傾向であるが、然し r を強く trill して發音するのではなくて、單に舌端を口蓋に向ひ、少しく反轉して發音する結果、一種の籠つた音が生じる。米音が英音に比較して、さうあらかじめ見えないのが

施行される。特に New York,

etc. むだり。然し英音では [ju:] と

等の語類が全部 [u:] むだり

する。次にこの標準發音を理解を容易ならしめるために英國の標準發音と比較しながら、特に注意すべき点について述べる。

I (一) 米語には英語の古時代の發音を保存している。あるのは wh-

の如きを概して [hw] と發音されるとのであるが、英語の新しい發音即ち [w] の影響を受けて、殊に [n] [w] が ES に廣く行われてゐる。薄

次拡張の傾向がある。

(二) -t. 米音は語中の -t をせりぬ

りと破裂させないところが、

例えば twenty が [twenɪ] へたれど、これは方言的である。

(三) 母音字 +r. 米音が英語と普遍

的に異なる点は、語頭、語中、語尾に現われるrをすべて發音する傾向であるが、然し r を強く trill して發音するのではなくて、單に舌端を

口蓋に向ひ、少しく反轉して發音する結果、一種の籠つた音が生じる。米音が英音に比較して、さうあらかじめ見えないのが

施行される。例： note, home, road,

mould, though, go, know, coal,

tomorrow, telephone, locomotive,

etc. むだり。 A.S. の語類は [no:tɪ], [ho:m],

etc. むだり。然し [o:] のように

make over for, shape up for, let in or look in upon catch on to

in oil, took in upon, taken up to, get away with, etc.

V

主節が直説法で述べてある場合、それにつづく從節に仮定法の現在を用いることは米語の一大特色と云ひてよい。されば、Optative Subjunctive (いわゆる

あるものであつて、英語においても古い時代にも用いたものであるが、今

አዲስ አበባ God bless You! አዲስ

一定の文句にその名残りをとどめしるにすぎない。英語においてはこの種の箇節に反定法現在を用いることは意

味の不明を來す夢があるので、言語の analytical な意識がはたらいたと見え

斯様な場合をContextの如何によつて、shall, should, may, might, 〇〇、

Nuance やせりあらわぬふたまへ
will, would たゞを生じ、艦船の

古い姿をとどめているのである。然るにこの構文には一つの條件がある。そ

これは主節に意志表示、判断等をあらわす名詞、形容詞又は動詞が用いてなけ

ればならない、そのうちで勿論動詞は
断然多い。次に一例を掲げる。..

The general concensus appeared to be that the men be returned as soon as conveniently possible after

ルの絶ざ consensus ルの終結を用いた例であるが、然るば如何なる名詞形容詞、動詞が用いられるかといふに次の如があつてありて、この表以外の用例もあるかも知れないが、大体網羅れていふようと思ふ。この表についての用例は米語辞典に掲げてあるからこれを参照しよ。だだねん。

advisable, advice, advise, appeal, arrange, arrangement, ask, beg, bid, concern, declare, decree, demand, desire, desirable, determine, determination, dictate, dictation, dictum, expect, hint, imperative, important, importance, insist, look to, necessary, unnecessary, offer, on condition that, order, plan, pray, prefer, propose, recommend, recommendation, refuse, refusal, request, require, see, set forth, snub, suggest, suggestion, urge, urgent, want, wish.

Slang. Slang は豈黙又は單語と訳したのぢ、slang ルの如き一概に之た下等な下司たるいびきであるもとの印象を與えた。勿論英米ともに slang の発生した言語層の如何によひて、随分下等なるものであつて、然し起源が下等だからといひ、さりまでも下等社会のみ流通するわざのものではなし。例

えば英語の bus にして、これは omnibus の語尾だけとつて用いたものやねんが、使いはじめた當時は Vulgar やねん、 ignorant やねん、 uneducated やねんとして激しく攻撃されたものであるが、今では立派な標準語であつて類例は少くない。言語の意味用法は墮落することも多いのであるが、向上するにあらるのである。然るに slang は米語の「一大特徴」と云ふべきで、むしろ俗語 (Colloquialism) と称すべきものである。これについて一々例をあげるまでもあるまい、拙著「米語辭典」及び「米語と英語」(研究社) を参照していただきたい。とにかく、相當に教養のある大衆を目立てとして出版されている新聞雑誌、例えば Time, Life, Newsweek, New York Times の三箇記事などを一覧されるならば私のいうところに大過なきを認められるであろう。また新聞雑誌だけではなく、相當に文名のある大衆作家の小説類も同様で、大辭典などにどうしても見あたらない slang が多いのである。然し老婆心まじでにいふべからざるならば、同じ新聞で発行されているだけに、Boston で発行される有名な Christian Science Monitor の如きは、英語の言語習慣が可なりよく保存されている土地で発行されているだけに、その文は殆んど英語とかわりはない。

■ English Dialect との誤送。
それでもやぢり米国式の slang だね
いわゆるやぢり。

それでもやはり米国式の slang はあるのである。

英語方言とその關係。

英領の各州から新大陸へ移住

uneducated であるといって激しく攻撃されたものであるが、今では立派な標準語であつて類例は少くない。言語の意味用法は墮落することも多いのであるが、向上することもあるのである。然るに *slang* は米語の一大特徴としてじょうらしく、むしろ俗語(Colloquialism)と称すべきものである。これについて一々例をあげるまでもあるまい、拙著「米語辭典」及び「米語と英語」(研究社)を参照していただきたい。とにかく、相當に教養のある大衆を目標として出版されている新聞雑誌、例えば *Time*, *Life*, *News-week*, *New York Times* の三箇記事などを一覽されるならば私のいうところに大過なきを認められるであろう。また新聞雑誌だけではなく、相当に文

が故郷の言葉をそのままに使うということはあまりにも自然のことであつて何等異とするに足りない。それらの英語のうちには標準語もあり方言もあるのであって、特に方言が米大陸において新しい生活圈を獲得し、そのまま生存しているのは不思議もないことだ。その発音も語義も英國の方言そのままの姿で用いられており、殊に東部と南部に相当保存されている。將來米語辭典が増補される場合には、この方面のこととも考慮に入れてやつて見たいと思つて いる。

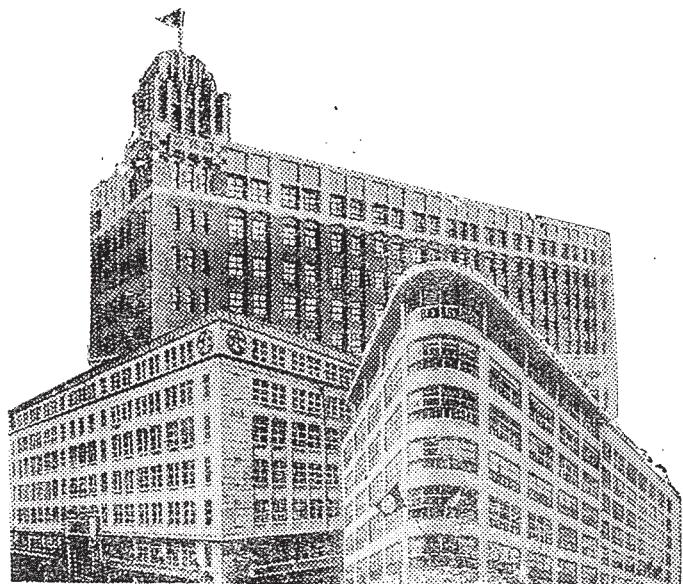
以上甚だ大ざっぱな説明であるが、米語の研究は普通の人たちが考へているよう簡單なものでないことは確実であつて、これから大いに研究する必要がある

後記

記

大辭典などにどうしても見えたらない
slang が多いのである。然し老婆心までにつけくわえるならば、同じ新聞でも、Boston で発行される有名な Christian Science Monitor の如きは、英語の言語習慣がかなりよく保存されている土地で発行されているだけに、その文は殆んど英語とかわりはない。

齋藤靜教授の此の一文は、教授が昨年十一月本学に來光、講演せられた時の要旨で、講演後教授に御無理をお願いして學報局に載いたものであります。これまでも適當な掲載の機を見ず敢て延引しておりましたが、新年度始を最適の機として掲載させて戴く事にしました。茲に謹んで教授に謝意を表するものであります。



百貨店は大丸

京阪神三都の中央部繁華街に聳ゆる大丸は名實共にお買物の中心として皆様に親しまれております 何卒京阪神三都での御買物は大丸へ……



大丸

大阪・京都・神戸